令和5年仙審第11号

裁 決

モーターボートAモーターボートB衝突事件

受 審 人 a

職 名 A船長

操縦免許 小型船舶操縦士

受 審 人 b

職 名 B船長

操縦免許 小型船舶操縦士

本件について、当海難審判所は、理事官荒木信也出席のうえ審理し、次のとおり裁決する。

主 文

受審人 a の小型船舶操縦士の業務を1か月停止する。

受審人 b を戒告する。

理 由

(海難の事実)

1 事件発生の年月日時刻及び場所

令和4年5月24日14時50分

新潟県直江津港北方沖合

2 船舶の要目

船 種 船 名 モーターボートA

登録長 5.75メートル

機関の種類 電気点火機関

出力 44キロワット

船種船名 モーターボートB

登録長 3.32メートル

機関の種類 電気点火機関

出力 11キロワット

3 事実の経過

Aは、平成14年3月に進水し、船尾部に船外機を備えたFRP製プレジャーモーターボートで、船体中央部に後部を防水シートで開閉できる操縦区画を設け、同区画前部にGPSプロッター、魚群探知機、舵輪、機関操縦レバー、機関回転計等を装備し、a受審人が1人で乗り組み、友人1人を乗せ、いずれも呼子笛が取り付けられた救命胴衣を着用し、釣りの目的で、船首0.3メートル船尾0.7メートルの喫水をもって、令和4年5月24日09時10分直江津港の係留地を発し、同港北方沖合の釣り場に向かった。

a受審人は、GPSプロッターを作動させ、舵輪後方の椅子に腰を掛けた姿勢で操船に当たり、保倉川、関川、西防波堤及び沖防波堤に沿って航行したのち、09時40分直江津港北方沖合の釣り場に到着し、魚群探知機を作動させて友人と共に釣りをを行い、期待した釣果を得ることができたことから、後部甲板に友人を待機させ、14時43分同釣り場を発進して帰途に就いた。

a受審人は、14時44分直江津港沖防波堤北灯台（以下「防波堤北灯台」という。）から026度（真方位、以下同じ。）1.76海里の地点で、周囲を一見して他船を見掛けなかったことから、航行の支障となる船舶はいないものと考え、翌日の釣り場を魚群探知機で探

すこととし、針路を195度に定め、7.0ノットの速力（対地速力、以下同じ。）で、手動操舵によって進行した。

a受審人は、14時46分防波堤北灯台から027.5度1.52海里の地点に達したとき、正船首860メートルのところに、Bを視認することができ、同船が錨泊中であることを示す黒色球形形象物1個を表示していなかったものの、船首を風上に向けてほとんど移動しない様子から錨泊していることが分かり、その後Bに向首して衝突のおそれがある態勢で接近する状況であったが、翌日の釣り場を魚群探知機で探すことに気をとられ、見張りを十分に行わなかったため、同船の存在も、この状況にも気付かなかった。

こうして、a受審人は、Bを避けることなく続航し、14時50分防波堤北灯台から033度1.08海里の地点において、Aは、原針路及び原速力で、その船首がBの右舷船首部に前方から15度の角度で衝突した。

当時、天候は晴れで風力3の北風が吹き、潮候は下げ潮の末期にあたり、視界は良好であった。

また、Bは、平成13年4月に進水し、船尾部に船外機を備えた和船型のFRP製プレジャーモーターボートで、船体中央部左舷側に魚群探知機兼用のGPSプロッターを装備し、b受審人が1人で乗り組み、友人2人を乗せ、いずれも呼子笛が取り付けられた救命胴衣を着用し、釣りの目的で、船首0.2メートル船尾0.4メートルの喫水をもって、令和4年5月24日10時00分直江津港の砂浜を発し、同港北方沖合の釣り場に向かった。

b受審人は、GPSプロッターを作動させ、右舷船尾部の物入れ蓋に座って操船に当たり、沖防波堤に沿いながら航行したのち、10時10分直江津港北方沖合の釣り場に到着し、同プロッター画面を魚群

探知画面に切り替えて友人と共に釣りを行ったものの、期待した釣果を得ることができなかったことから、更なる釣果を求め、同沖合の別の釣り場に向けて発進した。

b受審人は、12時30分衝突地点付近の釣り場に到着し、船首から重さ約5キログラムの錨を投じ、同錨に結んだ直径約8ミリメートルの錨索を水深約30メートルの海中に約45メートル繰り出し、同索の他端を船首部の索止めに係止して船首を北方に向け、錨泊中であることを示す黒色球形形象物1個を表示しないまま、機関を停止して友人2人を船体中央部の物入れ蓋の左舷側及び右舷側にそれぞれ座らせて釣りを再開した。

b受審人は、14時46分衝突地点で、船首が000度に向いていたとき、右舷船首15度860メートルのところに、Aを視認することができ、その後同船が自船に向首して衝突のおそれがある態勢で接近する状況であったが、これまでに自船の近くを航過する船舶を多数回見掛けたことがあったことから、接近する他船があっても錨泊中の自船を避けてくれるものと思い、見張りを十分に行わなかったため、Aの存在も、この状況にも気付かなかった。

こうして、b受審人は、Aに対して注意喚起信号を行うことも、同船が更に接近しても衝突を避けるための措置をとることなく錨泊を続け、14時50分僅か前右舷船首至近にAを視認したものの、どうすることもできず、Bは、船首が000度を向いたまま、前示のとおり衝突した。

衝突の結果、Aは、船首に修理を要しない擦過傷等を生じ、Bは、右舷船首部外板に亀裂等を生じたが、後に修理され、B同乗者2人のうちの1人が左第8、9肋骨骨折等を、他の1人が左肋骨骨折等をそれぞれ負った。

(航法の適用)

本件は、直江津港北方沖合において、航行中のAと錨泊中のBとが衝突したもので、衝突地点付近の水域には特別法である港則法及び海上交通安全法の適用がないことから、一般法である海上衝突予防法が適用されることになる。

海上衝突予防法には、航行中の船舶と錨泊中の船舶とに適用できる定型的な航法規定がないので、本件は、同法第38条及び第39条の船員の常務によって律するのが相当である。

(原因及び受審人の行為)

本件衝突は、直江津港北方沖合において、航行中のAが、見張り不十分で、錨泊中のBを避けなかったことによって発生したが、Bが、見張り不十分で、注意喚起信号を行わず、衝突を避けるための措置をとらなかったことも一因をなすものである。

a 受審人は、直江津港北方沖合において、同港に向けて帰航する場合、接近する他船を見落とすことのないよう、見張りを十分に行うべき注意義務があった。しかし、同人は、翌日の釣り場を魚群探知機で探すことに気をとられ、見張りを十分に行わなかった職務上の過失により、錨泊中のBの存在も、同船に向首して衝突のおそれがある態勢で接近する状況にも気付かず、Bを避けることなく進行して衝突する事態を招き、A、B両船に損傷を生じさせ、B同乗者2人を負傷させるに至った。

以上のa受審人の行為に対しては、海難審判法第3条の規定により、同法第4条第1項第2号を適用して同人の小型船舶操縦士の業務を1か月停止する。

b 受審人は、直江津港北方沖合において、釣りのため錨泊する場合、接近する他船を見落とすことのないよう、見張りを十分に行うべき注意

義務があった。しかし、同人は、接近する他船があっても錨泊中の自船を避けてくれるものと思い、見張りを十分に行わなかった職務上の過失により、Aの存在も、同船が自船に向首して衝突のおそれがある態勢で接近する状況にも気付かず、Aに対して注意喚起信号を行うことも、同船が更に接近しても衝突を避けるための措置をとることなく錨泊を続けて衝突する事態を招き、A、B両船に損傷を生じさせ、自船同乗者2人を負傷させるに至った。

以上のb受審人の行為に対しては、海難審判法第3条の規定により、同法第4条第1項第3号を適用して同人を戒告する。

よって主文のとおり裁決する。

令和6年9月26日

仙台地方海難審判所

審判官 永 木 俊 文